
万夫不当（ばんぷふとう）の軟弱者

長月 四郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万夫不当の軟弱者

【Nコード】

N9077Y

【作者名】

長月 四郎

【あらすじ】

僕の名前は吉北 敦、26歳、職業はシステムエンジニア。ひよんなことから中国に出向することになったのだけど、飛行機の中で異変が起き、なんと古代中国は三国志の時代にタイムスリップしてしまうことに。

万夫不当の強者共に囲まれて、軟弱者の僕が未来の知識だけを武器に生き抜いていく。これはそんな物語。

ブログ 過去への出向

僕の名前は吉北^{よしきた} 敦^{あつし}、26歳、職業はシステムエンジニアだ。情報系の大学を卒業して、まず成りたかったのがゲームのプログラマーだったのだが、どこも入社試験に落ちまくって、しかたなしに入ったのが今の会社、iPhoneやAndroidのアプリを製作している会社だった。

といってもこの会社だって学校の紹介があつたからお情けで入れたっただけで、まともに試験受けていたら入れなかつただろう。

とにかくゲームが好きだからゲーム会社って希望しただけで、それが駄目だったから似たようなITの会社っていう安易な気持ちで入社したんだけど、結構今の仕事はこれで楽しめている。

入社して3年、他人の企画のiPhoneアプリをいくつか作ってきた。しかし、どれもつまらないアプリでApp Storeのランキング100位にも入らない駄作ばかりだった。

事件はとある飲み会で、酒に酔って、つい「俺ならもつと面白いアプリを企画出来る！」と口を滑らしたところから始まった。そういう意見を汲んでくれちゃう会社なのだ。

翌日、部長に呼ばれて

「君は見どころがありそうだ。君に企画を任せようと思う。ただし、経費は抑えろ。だから我が社がオフショア契約している中国の会社にプログラムを作ってもらう。だから君はしばらく中国へ出向したまえ。良い企画を期待しているぞ。」

といきなり抜擢されてしまった。

気の弱いと自分でも自覚している僕にとっては、これは抜擢ではなく拷問でしかない。企画なんて思いつかないし、そもそも中国に一人で行って暮らすなんて、ぜったい、ぜーったい無理！！

しかし、上司の命令に逆らうことは出来ない。これがサラリーマンの悲しい定め。そんなわけで、僕は今、中国は北京空港へ向かう飛行機の機内にいるのだった。

成田を離陸して、もうどのぐらいたったのだろうか？腕時計はしない主義だから時間が分からない。「機内では携帯電話の電源を落としてください。」とアナウンスされていたから、iphoneの電源入れて確認する勇氣もないし。まあ時間はいいさ。そのうち必ず着くのだから。さつきちよつと雲の合間から青いのが見えたから、まだ海の上かな。

飛行機に乗るのは、これが人生で初めてだから、何か落ち着かない。隣の席の人は食後にワインをしこたま飲んで、今はいびきをかいて寝ている。機体が時折揺れたりしているのに、よく寝れるものだ。

僕は音楽でも聞いたら寝れるかと思い、座席に置かれているヘッドフォンを手に取り、それを肘掛の下ジャックに差し込んで機内放送でも楽しもうとした。

「ジージジー、ジージジー……。」

「なんだ、これ良く聞こえないな。」

操作説明書を見ながら、チャンネルを変えるのだが、良く聞こえ

ない。

「壊れてるのか？」

僕は、ちよつとむきになって、思いつき強くダイヤルを捻った。人には弱い分、物には当たってしまうのかもしれない。良い性格じゃないよな、やっぱ。女日照りが続くのも納得できる。これって職業のせいだけじゃないよな。

あー、やっぱり嫌になつてきた。中国行きたくない！！別の所に、いや、悪天候のため着陸できないから引き返す、とかないかな。神様お願い！！

とその時、突然機内の照明が全て消えた。

「え、なに？嘘？！いや、神様、今の嘘ですよ。」

「ジージジー、ジージジー……、ニインジャオウオマ？叫我？？」

今何か聞こえた？機内放送入ったのか？そうだ、この事態を説明しているのかもしれない。

僕はそう思つて、さらにチャンネルを捻った。

「ゴオoooooooooooo、ゴオoooooooooooo、ドooooooooooooン！！」

もの凄い音を立てて、機体激しく揺れる。まさか、墜落するの？！
！嘘だろ。僕の人生、これで終わるの？そんなの嫌だoooooooooooo。

「兄者、こいつ目を覚ましたぞ。」

「そのようだな。」

中国語……？僕は確かに勉強してきたけど、こんなにはつきり聞き取れたつけ？ってその前に確か飛行機乗ってて落ちたんじゃなかったか？。

僕は今、何故か他人の家にいて、椅子に座っている。目の前にはよく中華料理屋で見るとような丸テーブルがあつて、両脇に二人の男性が座っていた。

「やつぱり、生きておつたか。良かった。良かった。」

「え、僕どうなつたんですか？どうしてここに。」

まるで意味が分からない。でもどうやら助かつたようだ。でもなんでこんなところに座っているんだろう？しかも……。

「僕の服？スーツじゃなくなってる！」

「あー、あの変な服か？随分汚れとつたし、ボロボロだったから、わしの服をお前にあげたんじゃ。服は焼いて捨てた。裏の竹藪で大きな音がしたと思ったら、そのままの座った格好でお前が気を失っていたんじゃ。わしがそれを見つけてここへ運んできたんじゃ。」

「そんな、じゃあポケットにあつたiphoneは？」

「何言つとんじゃ。何語じゃ。」

どうやら飛行機が落ちたのは中国で、僕は助かったらしい。それにしてもこの家、なんだか昔のカンフー映画に出ているような古臭い家だ。今でも中国にはこういう家が多いのだろうか。やっぱり急な経済成長を遂げたから格差が激しいのかもしれない。

「わしの名は麋芳^{ヒボウ}、こっちは兄の麋竺^{ヒジク}じゃ。お前の名は？」

そういえば、この人なんか強引な感じの人で苦手だな。でも、なんで僕はこんなに中国語理解できちゃうんだろ。頭の打ちどころ良かったのかな。別に今、頭痛くはないけど。この手のタイプの人結構礼儀にうるさいから、ここはちゃんとお礼言わないと。サラリーマンとして培ってきた処世術ってやつだな。

「吉北^{よしきた} 敦^{あつし}です。助けてくれて、ありがとうございます。」

「ハア？何て？どんな字書くんや……。ああ、“敦煌^{トシコウ}”の“敦^{トシ}”かい。敦^{トシ}さんか。」

「ああ、まあ、そうですね。」

「で、どこから来たん？」

「日本です。」

「日本？そんな国ないやろ。どの辺じゃ。」

この人地理に相当疎いのかな。それとも発音悪かったかな。まあ、ここは外国、丁寧な態度で接しないと。

「えーとですね。東の海を渡った所にある島国です。」

「兄者、知ってるか？」

「うーん。それは、倭の国の事を言っておるのかな。私の知り合いに昔、倭の国に行ったという者がいてな。そういえば君のように背の低い小さい者ばかりの国だと言っていたな。」

お兄さんの方は口調は丁寧だけど、背が低いって僕がちよっと気にしていることを、よくもずけずけと。でも、ここで嫌な顔をしちゃいけないな。話を合わせないと。

「えー、そうですか。確かに昔倭の国と言われていたようですね。随分、昔の話ですが……。」

「今は違うのか。そうだったのか、それは失礼した。それより、お客人。もう少しお話をしたかったが、これから劉備様の所へ行かなくてはならなくなてな。めでたく徐州の牧に就任されたお祝いがあるのじゃ。」

“劉備様？” って、

「あの劉備 玄德？！三国志の蜀の皇帝？！」

「おい、敦さんよ。劉備様の事、呼び捨てにするのはまずいぜ。」

そう言つて麋芳がさんが、掴み掛かってくる。僕は突然のことで顔を強張らせるだけで声が出ない。

「やめんか麋芳！それより客人。今面白い事を言つたな。劉備様

の事を知っているのか？ちょうどいい。めでたい宴の席だ。客人も連れて行こう。」

「兄者、何を言うてるんじゃ。どこの馬の骨ともわからん奴を連れていったら関羽カンウ様に怒られるぞ。」

“関羽カンウ”って、やっぱり三国志？！僕はいつの時代にいるんだ。タイムスリップしたの？
バミューダトライアングルで起こるって言うけど、東洋にもあったんだ。

「関羽カンウ雲長ウンチョウですか？美髯公の？」

「ほお。やっぱりこの客人面白そうだ。倭人にしては、なかなかの見識を持っている。そうだ、お前は私の親戚、従妹ということにしよう。お前の名は麋ヒト敦ンじゃ。よし、じゃあ早速支度をしろ。麋ヒト芳ホウ！お前もだぞ。」

「わかったよ兄者。麋ヒト敦ンかあ、まあ確かに面白そうだな。」

えー……。麋ヒト敦ンって“ヴィトン”？まあ、ルイ・ヴィトンみたいで格好良いけど、僕の名前。って喜んでる場合か！

どうやら僕は古代中国、三国志の時代にタイムスリップしちゃったみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9077y/>

万夫不当（ばんぷふとう）の軟弱者

2011年11月27日17時53分発行